

第二回「答えが出ない問い 高校生のオーストラリア」

アメリカでの一か月のホームステイ後、私は日本の中学生と何ら変わらず部活にいそしみ、引退後は高校受験のために勉強をしていた。ホームステイの経験がホームステイ前と同じ生活をするのを、つまり日本の中学生社会に今までと同じように同化するのをどこかためらわせていたというようなことは何もなかったが、それでも一か月のホームステイは「大きなチャレンジ」として私の中で思い出深く残っていた。

そんな私が高校生でもう一度国際交流プログラムに参加しようと思ったのは、そんなに不思議なことではなかった。今度参加したプログラムはオーストラリア交流、現地の高校に1か月通い、また中学生の時と同じようにホームステイもする。国際交流参加者が集まって数回行う事前活動では中学生の参加者が圧倒的多数だったため、年齢的に少し離れたところにいる私は事前活動でリーダーシップをとることが多かった。思春期という面倒くさい時期に国際交流という大きなチャレンジをする中学生を、年上かつ既参加者としてリーダーのような役割を果たす、そのような光景が繰り返し広がっていた。

私は日本では女子高に通っていた。着ている服も髪の色も肌の色も、そして勢い持っている雰囲気やバックグラウンドも似ている女子1000人余りの集団は、見たことがあるひとはわかると思うが、なかなか異様である。均質化された集団というものは、これほどにまで無個性かつ匿名的にうつるのか、と言葉を失うくらいだ。

対してオーストラリアで通った高校は共学だった。制服は決まっているが、太ももの半分くらいスカートを短くしている人もいれば、肌を出さないイスラム教徒の生徒もいる。公立



写真1：学校の友人たちと

高校だったので、持っているバックグラウンドも多岐にわたっていた。オーストラリア人、UK出身、日本人とオーストラリア人のハーフ、両親はタイからの移民、サモア諸島から来た——。日本の高校と比べて、というわかりやすい対比構造を作る気は毛頭ないが、今までと全く違う環境に来たということは、私にとって比較的大きな衝撃だった。

幸運なことに、私はその高校に行ったただ一人の日本人だった。私と一緒にプログラムに参加した学生の中では、複数人と同じ高校に滞在した人もいたが、そうするとやはり日本人同士でコミュニケーションをとることが多くなってしまふ。日本語を喋る機会があるというのは、精神的には安定するとは

思うが、せつかくの一か月のチャレンジを考えると少しもったいない。幸いなことに日本語を喋るのは私一人だったので、私のオーストラリア交流は完全に英語漬けの生活だった。出国前はこんなことが自分に起こるとは想像すらしていなかったが、帰国当日には英語で会話するのに慣れすぎて、日本語をすっかり忘れてしまったくらいだった。帰国後には何事もなかったように日本語で話せるようになったが、英語漬けの生活を送るとどのような風になるか、自分で体験できたのは貴重な経験だった。

また、私は決して「明るい」とか「社交的」などという形容詞が似合う性格ではない。一人しかいない日本人はなかなか珍しかったらしく、現地の生徒たちは何かと私に話しかけてくれた。受け身であることは決して良いことではないが、このように周りがあたたかく助けてくれたのは、生来肝心なところで引っ込み思案で臆病な私にとって嬉しくありがたいことだった。

オーストラリアでの生活は、その後の私の進路を考える上で大きな影響を与えた。オーストラリアで親しくしてくれた友人たちの存在は帰国後ももちろん大きかったが、特筆すべきははっきりとした理由が2つある。1つ目はオーストラリアで受けたある授業だ。人権や人種差別についてのワークショップ形式の授業は、日本では受けたことがなかった種類の授業だった。内容がいかんせん抽象的で、そのときの私の英語力では断片的にしか理解ができなかったが、「差別について取り組む授業があること」があることが私にとってなかなか衝撃的だった。また「現在のオーストラリアにおいてこの授業を行う必要性がある」「だからこの授業をする」ということ先生の意味をまざまざと感じた。

二つ目はオーストラリアの公立校と私立校の違いだ。これらは実際に訪問して感じた違いである。私のホストファミリーの子どもたちは私立に通っていて、一日だけそこに訪問させてもらった。そこは公立高校と比べて圧倒的にバックグラウンドの類似性が高かった——つまり白人の生徒が大半の学校だったのだ。同じオーストラリア国内にありながら私立の高校は、いわば「日本的」だった。



写真2：ホストファミリーの Irons Family

この記事を読んでくれている方々にはしごく当たり前のように思えるかもしれないが、人種のサラダボウルのようにありながらフレンドリーな公立高校と、差別に関する授業の必要性和公立校と私立校の違いに現れるオーストラリアの社会があまり結び付かなかったのだ。ど

ちらが良い、悪いということを書きたいわけではない。恥ずかしいことだが無知ゆえに私はそれについて何の意見を持てなかったし、また持つべきではないと思った。そのときの私のオーストラリアの知識といえば、中学高校で習う程度のことしか知らなかったのだ。行った、行っていないという経験が度外視されてもいいくらいの不勉強さだった。オーストラリアには私が知らない社会の仕組みがあるかもしれないし、歴史を持っているのかもしれない。一か月の滞在者では見えない部分はきっとあるだろう。知らない部分が大半の中で一面的に意見を決めてしまうのは、思考を停止するのと同じではないか――。

うまく結びつかなかった感じを残したまま私は帰国し、高3を目前とする学生がおおむね悩み始めるように、進路について考え始めた。私はオーストラリアについて勉強ができる大学に進むのはどうだろうと考えた。国際関係の勉強に興味はあったが、いまいちどの言語、地域、学問も決めるのは説得力が薄い気がしていたのだ。オーストラリアなら、私が滞在したことに関連した理由がはっきりとある。4年間勉強をするのなら理由がはっきりとしたものを選びたかった。

そうして二回目の国際交流が私の進路を決定づけることになった。高校生という多感な人格形成期での体験は、自分のそれからの生活を大きく左右することがある。私にとってはこの国際交流活動がその一端を担うことになった。

このエッセイの読者には高校生もいると聞いた。自分の人格形成の時に、よりよい経験を、すぐに答えの出ないような経験をたくさんしてほしいと思う。答えがでないということは目を背けるものではない。その後の自分に対する大きなヒントであり、その問いに対して必要な客観性だ。昨今は自分の意見をもつということが重要視されがちであるが、自分の意見と同じくらい、その問いに対して「今は答えが出せない」と判断する勇気も必要のように思えるのだ。